

# 大久根 茂著『秩父の峠』

民俗学界において、交通・交易伝承は、調査・研究の成果が少ない分野である。かかる状況下、峠をまとめた本書の上梓は貴重であり、その存在はより広く知られて良い。まず、目次に従って、取りあげられた峠を挙げておこう。

海拔二〇〇〇メートルの原生林 十文字峠  
 日本三大峠の一つ 雁坂峠  
 ブナ林が美しい 仙元峠  
 伝説を秘めた峠 妻坂峠  
 江戸への最短ルート 正丸峠  
 義経が絶賛した眺望 顔振峠  
 信仰の道からレジャーの道へ 大野峠  
 女工が越えた峠 粥新田峠

史苑（第四八巻第二号）

一里塚のある峠道 釜伏峠  
 隣合う小さな峠 秩父・児玉境の峠  
 消え消えの旧道 土坂峠  
 峠の盛衰をみる 志賀坂峠  
 鉾山を支えた道 八丁峠

本書の存在意義を、評者は次のようにとらえている。すなわち、特定の地域に絞って峠を民俗学的視点から取りあげ、まとめている、ということである。管見の限り、かかる類のものはさほど見出せず、一石を投じたものとして位置づけられる。  
 また、そのモデルとして「秩父」が選ばれたことが、重みをさらに増幅している。

胡 桃 沢 勘 司

日本列島の地理的環境は、基本的に山地丘陵が多い、と言える。そのようななかで、最大の平地が広がるのは関東平野である。秩父の山々は、その大きな平野の西北部に連なり位置している、ということをしつかり見据えておかななくてはならない。地理的条件が、わが国最大の平野との接点にある、ということが、「秩父」をより際立ったものにしていくのである。謂わば日本のなかでは独特の地域であり、その峠を取りあげたことに、本書の意欲を汲みとることが出来る。評者を含め、峠の研究といえば「四界山」のところに、ついつい目が行ってしまうが、視野に入るべきはかかるところだけではない、ということをし、本書は教えてくれるのである。

新しい視点から学びえたことを念頭におきつつ、今度は行間から感じたことを、いくつか挙げてみたい。

前述のとおり、本書では、峠を個別に記述するという方法がとられている。これは、各々の事情がよく整理して提示され、読者の理解を助ける利点をもっている。ただ、これのみでは、「木を見て森を見ず」になりがちであり、少なくとも評者にはそう見える。「秩父」の重みは既述のとおりであり、それをより鮮明に見せてほしいのである。「秩父の峠」とは何なのか。

察するところ、著者は、これを峠に関わる事象をテーマ

別に整理する、という作業を通じ、浮きぼりにすることを試みているようである。具体的には、峠の分布、峠の名称、交易路としての役割、峠越えの旅人、婚姻圏と日常生活、峠の信仰、等々である。「比較」を前提にする時、既存の研究成果と照らしあわせ、基礎的な列挙と言って良い。しかし、率直に言って、これらの事項を全体を通して総括する記述がなされているようには見えないのである。これが「不鮮明」につながるようなのだが、如何であろうか。

次に、これも個別記述についてだが、本書は完全並列形式である。峠が一つずつ印象に残る効果は確かに大きい。だが、「個」を強調するあまり、謂わば「ひいきのひきたおし」になって、各々の特徴が却って把握しにくくなっている。雁坂峠には「日本三大峠」、秩父・児玉境の峠には「小さな峠」と副題をつけているが、著者がかかる認識を有するのであれば、これを一つのメルクマールとして類型分けをしてみる、のもまた記述法ではなからうか。「似たもの同士」をまとめ整理することは、特徴を描き出すのに案外有効だと思う。蛇足になるが、分け方には様々な目安があるだろう。たとえば位置条件、である。秩父盆地を中心に据え、正に関東平野との接点そのものとなっている峠群、およびそれ以外、というのはどうだろう。接点中の接点である正丸峠、奥秩父中の奥秩父である十文字峠、

を同一レベルでとらえようとするのは、いささか粗い、という気がする。八頁で指摘している「峠の役割」は、これらを踏まえて、より明らかにされるのではなからうか。

第三は、著者が峠に対する最大の関心を、峠と人とのかわりあい、にしていることである。民俗学的視点から峠を見る場合、これはもっともオーソドックスな認識と言える。具体的に分析された生活事象は前述列挙したとおりであり、基礎を十分踏まえたものであることは、広く認められるだろう。そのうえで敢えて言いたいのは、著者が自身のトレードマークをあまり出していない、ことである。

著者は、これまで主に有形民俗資料の分野において、着実に業績を積み重ねてきている。これを本書に生かすことが、何故なされなかったのだろうか。たとえば屋根型の相違に注目すべきことが、指摘されているのである（蜂矢敬啓『坂東の峠路』五八頁、昭和五四年七月）。蜂矢氏は正丸峠・妻坂峠を考察するにあたり、この点に着眼し、名栗谷の谷口と奥地では文化圏が違おうと推定しているが、ハイキング時の印象しかもため評者にも、これは鋭い、と思えるのである。本書七四頁で妻坂峠を挟む婚姻圏を取りあげているが、かかる有形文化を指標とした文化圏は、念頭におかれていないようである。人の生活、は個々の事象が単独に存在するものではない。互いに連関しながら、展開をして

ゆくのである。せっかく著者が得意とする分野で秀れた分析がなされているのだから、基礎的事象を取りあげる際、両者対照という手法は、「著者の独自性」を引き出すもの、となるのではなからうか。さらに、「秩父の有形文化」を、より幅広く取り入れることにより、これは一層印象深いものとなるだろう。蜂矢氏の見解は、本書の存在意義である接点そのものに関わることであり、著者には格好の指針ではなからうか。

最後は、著者の「峠は障壁ではない」という、本書の結論とも見なされる記述、である。著者に問いたいののは、これが「秩父」という独特の地域をモデルとしたためのものであるのか、それともさらに広げて当てはめられるという見通しに基づくものなのか、ということである。もしも前者であるなら、これ以上言うことは無い。しかし、仮に後者であるなら、「はいそうですか」というわけにはいかない。評者の以前の愚考（「峠——その社会性と経済性——」『交通史研究』一一号昭和五九年三月）と、微妙に喰い違ってくるからである。

評者がモデルとしたのは、越後の最北端、岩船郡の峠である。ここでの分析によって提示したのは、峠は二律背反的な機能を有するものなのだ、ということである。すなわち、ある時は人々の結びつきを絶つものとなるが、ある時

は人々を結びつける作用をなす、というもので、峠に対する評者の基本的な考え方と言って良い。強調したいのは、著者の見解を否定しているわけではなく、「それだけでは律しきれない」ことを、言いたいだけなのである。「喰い違い」を整理すれば、著者は流通性を重視、評者は境界性と流通性の二面を見たい、ということになるだろう。

どちらがより一般化できるかは、事例分析を積み重ねていくことが明らかにしてくれるはずである。評者は常に前述の作業仮説をもとに峠に臨むためか、本書に盛られたデーターのなかに一寸気になるところが見出された。六五・六六頁の「両替場」である。著者は、この地名はここで直接荷の交換が行なわれた名残り、と解釈しているが、果してそうだろうか。所謂無言交易（北見俊夫『市と行商の民俗』一九頁、一九七〇年十一月）を念頭におく必要はないのだろうか。北見氏が、無言交易の場としての峠、を指摘していることは重要である。この際、峠に境界性ありや、というのは議論が分れるところだろう。物が行き来するのだから流通性がある、と見るのが素直というものかもしれない。しかし、この際見落してならないのは、物を持ち運びする人間は、峠を境として互いのテリトリーに入ることはない、という事実である。無言交易は、一つの事象において、正に峠が流通性と境界性を露呈するもの、と位置づけられる

のではなからうか。「両替場」が、もしも無言交易の名残りであるならば、かかるところを具体的に教えてもらったことは貴重であり、二面性を各事象ごとに見ていた評者の認識は改めなければならないだろう。

以上、多くを教えてもらったことを感謝するとともに、盲言を連ねたことをお許しいただきたい。

私事になるが、著者と評者は一九七一年四月から七五年三月まで同級生として学生時代を過ごし、今も互いに民俗学を手がけ「オマエ オレ」と言いあう仲である。基礎的指導をしてくださった故宮本馨太郎先生（一九七七年三月まで立教大学文学部教授）の学恩を生かさなければならぬのだが、末弟同士のこの議論、果して先生は何と御覧になるだろうか。（B6版 二二六頁 昭和六三年四月三日 さきたま出版会 一五〇〇円）（評者は、早稲田大学講師）